

平成二十六年 度

帝京大学中学校 第一回入学試験

国語問題

注

意

- 1 解答用紙に受験番号、氏名を忘れずに記入すること。
- 2 問題の中で、字数が指定されている場合は、特に指示のない限り、句読点等を字数にふくめること。
- 3 鉛筆は濃いものを使い、はっきりと書くこと。
- 4 試験終了後、解答用紙のみ提出すること。
- 5 試験問題は、からまで。

試験時間 50分、100点満点。

□ 中学二年生のぼく（橘論里）は、学校の創立二十周年記念行事の実行委員会副委員長として、友人の轟元氣、水原白や先輩たちとともに、校庭にろうそくで冬の星座を描き出す「キャンドルナイト」を計画し、いよいよ当日を迎える。それに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

冬至の朝の空は、薄い雲に覆われていた。冷えこみもいちだんと厳しい。

終業式を終えた生徒たちは、手渡された成績表に□X□しながら、それでも晴れやかな顔つきで校門を出ていった。明日から冬休みが始まる。

グラウンドには、すでに半分以上の紙コップが並べられている。全校生徒の手で並べられたものだ。下校する前に、クラスごとにまとまって、ひとり二個ずつ置いてもらった。①慣れない生徒たちのやることなので時間がかかるかと思っていたら、みな思いのほかてきぱきと動いてくれて、作業は予想以上に早く終わった。残りの部分は、あとで実行委員が埋めていく予定だ。一般の生徒たちはいったん家に戻り、キャンドルナイトの始まる時刻にまた集まることになっている。

ぼくたち実行委員は、このまま学校に残って最後の準備に取りかからなければならない。それぞれ持参した弁当を、教室に持ちこんで食べた。

今日の弁当は父さんが作ってくれた。弁当箱の中には、ふりかけご飯と、唐揚げが五つ、それから「野菜」としてプチトマトが五個入っている。

「ものすごく潔い弁当だな」

元気の言葉に思わず笑ってしまった。ぼくは添え物でないプチトマトを口に放りこむと、ひとつずつしっかり噛みしめて食べた。

昼食の後、グラウンドで最終チェックをしていると、校舎のほうから進藤先輩が手を振りながらやってきた。他の三年生の委員たちもつぎつぎ集まってくる。原先輩もいる。木崎先輩は母色のマフラーを巻き、周囲に華やかな笑顔をふりまいている。

「よし、じゃあ始めようか。各自、空いている場所にキャンドルを並べてください」

ぼくが声をかけると、みな図面を手には散らばっていく。紙コップの底に砂を入れる者、キャンドルを入れていく者、コップを並べる者、手分けして広いグラウンドに星座を作っていく。

「おーい、ここ、下絵が消えかかっている！」

「ねえ、キャンドル入っていないのがあるよ」

「この星って、紙コップ何個？」

ぼくはあちこち駆け回りながら、キャンドルの位置と個数を人念にチェックしていった。と、水原がぼくのほうへ近寄ってきた。困ったような顔をしている。

「ねえ、ちよつとこれ見て。なんだと思う……？」

手近にあった紙コップをひとつ持ちあげ、裏返してみせた。なにか文字が書いてある。

「なにこれ。『K高合格』……？」

「こっちは『T坂先輩』だって。ハートマークも付いてる」

同じように、底に文字の書かれた紙コップがいくつも見つかった。一般の生徒たちの並べたものらしい。ぼくたちが首をひねっていると、進藤先輩がにこしながら近づいてきた。

「あ、気づいた？ それ、いいアイデアだろ」

話を聞いて驚いた。

——冬至の夜に、キャンドルに願い事を書いて灯すと望みが叶う。太陽の力のいちばん弱まる日、炎はあらゆる力を吸いあげて光を保とうとするからだ——

そんな怪しげな噂を、ひそかに校内に流したのだという。

「べつに、わざと流したわけじゃないよ。うそをついたわけでもない。ぼくはただ廊下で、原たちと、そうだったらおもしろいのかなあって話をしただけ」

ぼくと水原はあんぐりと口を開いた。

「まさかここまで効果的とは思ってなかったよ。でも、おかげでみんな競って並べてくれただろ？」

進藤先輩はそう言つて笑顔を見せると、再び作業へ戻つていった。

「先輩、すごい」

その後ろ姿に向かつて、水原がぼつりとつぶやいた。

(中略)

ぼつぼつと雨が落ちてきた。薄曇りだった空にいつの間にか灰色の雲が伸びている。

ぼくはグラウンドに立ちつくしていた。

「まずいな」

隣で進藤先輩が言う。

「雨が降ったら、火は灯せない。……撤収するとしたら、早めがいい」

「そんな」

ここまで来て。水原が **A**泣きそうな顔をしている。

どうする。どうすればいい。助けを求めるようにあたりを見回す。すでに生徒や見学の保護者が大勢集まっている。今さら、中止になんか——。

「橘！」

ふいに名前を呼ばれた。谷先生が走ってきて、ぼくに鍵を手渡す。

「防災倉庫の鍵だ。中にブルーシートがある。ありったけ持ってこい」

先生はすぐに背を向け、その場で深く息を吸いこんだ。集まっている生徒たちに向かつて、これまで誰も聞いたことがないくらいの声を張りあげる。

「全員、注目！」

びんと響く声に、体じゅうがびりびりとなる。隣で元気が耳を押さえた。

「傘のある生徒は校庭に集合！ くり返す、傘を持って校庭に集合！」

校庭のはるか向こうにいる人たちも、みんなふり返つてこつちを見ている。

「早く行け！ 大丈夫、この雨はすぐやむ。急げ！」

「はいっ！」

ぼくたちは倉庫へ向かつていつせいに駆けだした。

ブルーシートを抱えて戻つてくると、思いがけない光景が目に見えこんできた。

傘を持った人々が、ずらりと校庭に並んでいた。

みんなキャンドルが濡れないように傘をさしかけてくれている。傘を持っていなくて、この寒空に、紙コップをまたぐようにして自分の体で守つてくれている者もいた。ハンカチやタオルで覆つてある場所もある。保護者や先生たちの姿も見えた。いちばん前で傘を振りながら手招きしているのは、校長先生だ。

「すげえ……」

元気が息を弾ませながら言った。

「傘と人で、星座ができてる」

水原が泣き笑いのような顔で言う。

「橘！ 轟！ 走れ！」

谷先生の怒号に、ぼくたちは再び走りだした。

先生の予想どおり、雨は二十分程度でやんだ。

たいした降りではなかったもので、そつと覆いのブルーシートを外したときも、中はほとんど濡れていなかった。砂が少し湿った程度だ。ところどころひっくり返ってしまった部分もあったが、きちんと並べ直したり、新しいものと取りかえたりして、すぐにもどの状態になった。

この一幕のせいで、すでにとつぷりと日が暮れて、あたりは真つ暗になってしまっている。

点灯は、三十分遅れで始まることになった。

「ひー、冷てえ」

元気がタオルでごしごしと髪や肩をこする。さつきブルーシートを運んでいて、雨に濡れてしまった。ぼくの手もかじかんで、すでに感覚がない。水原が手袋を外して、はあはあと息を吹きかけていた。ふと、誰かの視線を感じて目を上げると、木崎先輩がこっちを見ていた。ぼくが見ているのに気づくと、先輩はポニーテールを揺すり、ふいと向こうを向いてしまった。

「よし、じゃあみんなライターを持って、点火準備」

谷先生の号令がかかる。

きゃあつ、と声をあげ、女子の一群が先を争うようにグラウンドに飛びだしていく。

そのとき、後ろで「ねえ」と声がした。

「先に、委員長たちに行かせてあげたら？」

声の主を見て驚く。木崎先輩だった。つんと顔を上げ、まっすぐに前を見ている。

ぼくと進藤先輩は顔を見合わせた。元気がひゅう、と音のしない口笛を吹く。先に飛びだしていった女子たちが、気まずげな顔で戻ってきてみんなの後ろに回った。

「……あんたも行けば？」

とん、と押しだされるように水原がよろめきでる。ふり返るともうその場に木崎先輩の姿はなかった。水原が戸惑ったような顔でぼくを見てくるので、大きく笑顔を作ってみせた。

「じゃあ、みんなで行こう！」

ぼくたちがグラウンドに歩みでると、みんながその後続いた。間隔を取りながら、ばらばらに散っていく。進藤先輩はぎよしや座の力ペラの前に立ち、元気はこいぬ座のプロキオンに陣取っている。木崎先輩はおおいぬ座のシリウスの前につく。水原は、オリオン座の三ツ星のところにいる。

「せつかくだから、リゲルに行けば？ 一等星の」

ぼくが声をかけると、水原は首を振って、

「ううん。ここがいい」

と笑った。ぼくは小さくうなずき、同じオリオンのベテルギウスのあたりに立った。

そこからぐるりと周りを見渡す。みんなそれぞれの位置についていた。暗がりの中、千五百個のキャンドルが、これから火をつけられるのを静かに待っている。

ふと、命の始まる前は、こんな感じなんじゃないかと思った。

そのとき、校舎の明かりが消えて、カウントダウンが始まった。

「十、九、八、七、六、五」

目を閉じてその声を聞く。

「四、三、二、一、——」

今は、真つ暗な闇だけがある。

「点火」

カチリ、とかすかな音をたてて炎が現れた。キャンドルの芯にその火を移す。

ぼうつ、と灯りが灯った。

紙コップに反射した光がやわらかくあたりを照らす。

わあつ、と周囲から声にならない声があがった。

初めに灯すのは、一等星の星々だ。周りで見ている人には、きつと暗闇の中、星が生まれていくように見えるだろう。カペラが灯る。ポルックスが灯る。ひとつ、またひとつと星が輝きはじめる。順に火を入れ、七つの一等星すべてがそろったところで、冬の大三角と、六角形の冬のダイヤモンドが姿を現した。

続けて、二等星にも火がつけられていく。校庭のあちこちで、ぼつり、ぼつりと金色の炎が広がっていく。

初めに星々に火を入れるべきだ。そう強く主張したのは、水原だった。

「だって、初めにあったのは星でしょう？　そしてそれをつないだのが星座だもの。その逆じゃないわ」
そう言つて譲らなかつた。

やがて、校庭にすべての星が出そろつた。
今はまだ、空にあるのと同じ、ばらばらの星たちだ。これからそれをつないで星座に変えていく。ぼくたちはつきつきと火をつけていった。

手のひらに収まるくらいの小さなろうそくの灯りが、つながり合つて、やがて地面に大きな物語を描きだす。闇の中、ろうそくの燃える匂いがした。^④こんなに小さな炎なのに、足もとがほんのり暖かい。夢中で火をつけていると、とん、となにかやわらかいものが肩に触れた。水原だった。いつの間にか、足もとにオリオン座が完成していた。そのとき、^⑤水原の言っていた言葉の意味がすとんと胸に落ちた。

——初めにあったのは星でしょう？

ああ、そういうことか。

頭ではわかっているつもりだった。だけど今、もつとべつの深い場所で、それがきちんとわかつた気がする。

顔を上げると、他の星座もあちこちで結ばれようとしていた。

すべてのキャンドルに火が灯されたとき、グラウンドの上に、巨大な冬の星座と、学校の創立を祝う文字が、輝きとともに姿を現した。

ぼくたちの手で並べた紙コップが、光をたたえて闇の中に浮かびあがっている。

わあつ。

観客からひととき大きな声があがった。

「すごい」

「きれい……」

どよめきがさざ波のように広がっていく。

その声を体全体で受けとめながら、一瞬、ぼくはその場で目を閉じた。

(市川朔久子『紙コップのオリオン』より)

問一 X にあてはまる語句として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 自画自賛 イ 四苦八苦 ウ 一喜一憂 エ 喜色満面

問二 線①「慣れない生徒たちのやることなので時間がかかるかと思っていたら、みな思いのほかできてきびきと動いてくれて、作業は予想以上に早く終わった」とありますが、作業が「予想以上に早く終わった」理由は何ですか。文中の語句を用いて、五十字以内で説明しなさい。

問三 線A「泣きそうな顔」、線B「泣き笑いのような顔」に表れている水原の気持ちの説明として適切なものを次の中から一つずつ選び、ア～オの記号で答えなさい。

ア みんながキャンドルナイトを成功させるために協力してくれていることに對する感謝と感動。
イ 学校全体で行う大きな行事なのに誰も助けようとしてくれないことに對する不満と絶望。
ウ 応援してくれていると思つていた先輩まで中止をすすめることに對するショックと反発。
エ せっかくな準備したキャンドルナイトが中止になるかもしれないことに對する不安と悲しみ。
オ 紙コップで作るはずだった星座を多くの人と傘で作ってくれていることに對する驚きと満足。

問四 — 線②「ふと、誰かの視線を感じて目を上げると、木崎先輩がこつちを見ていた」とありますが、木崎先輩はこの時どのようなことを思っていたのですか。説明として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 実行委員としてキャンドルナイトの実現に協力してきたが、受験のためにそれを中断しなければならず、最後までそれにかかわれた「ぼく」たちをうらやましく思っている。
イ 雨に濡れながらも、キャンドルナイトを成功させようと一生懸命けんめいになっている「ぼく」たちの努力を認め、それを集まった人々に伝えたいと思っている。

ウ 雨の中で必死にキャンドルナイトの準備をすすめる「ぼく」たちをねぎらいたいが、わざわざ引き止めて言葉をかけるのも恥はずかしいので、どうしようかと思っている。

エ キャンドルナイトが自分の思うような行事にならず、それに反対して行事の計画を進めてきた「ぼく」たちに反発し、このまま行事が中止になればいいと思っている。

問五 — 線③「暗がりの中、千五百個のキャンドルが、これから火をつけられるのを静かに待っている」について、

1 この部分に用いられている表現技法を次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 倒置法たうち イ 反復法 ウ 体言止め エ 擬人法まじん

2 この表現から、どのようなことが読み取れますか。その説明として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 「ぼく」がこれまでどれほど大変な準備をし、どれだけ苦労してきたかをしみじみと振り返っているということ。

イ 共に準備を進めてきた水原に対する「ぼく」の気持ちだが、しだいに高まってきているということ。

ウ キャンドルナイトを準備した「ぼく」たちや、見ている人たちの期待感と緊張感きんじやうが高まっているということ。

エ また雨が降ってきてキャンドルナイトが中止になることに対する不安が、人々の間に広がっているということ。

問六 — 線④「こんなに小さな炎なのに、足もとがほんのり暖かい」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちの説明として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

ア 自分ひとりの力で企画し、作り上げたキャンドルナイトが成功したことに、達成感と満足を感じている。

イ 先輩の協力でようやく実現したキャンドルナイトの炎を見て、自分の無力さに絶望感と苦惱くわうを感じている。

ウ 無我夢中むがむちゆうでやりとげたキャンドルナイトが完成し、終わってしまうことに、違和感わいごと寂しささびを感じている。

エ 多くの人が力を合わせて準備したキャンドルナイトが成功しつつあることに、充実感じゆうじつと喜びを感じている。

問七 — 線⑤「水原の言っていた言葉の意味」とありますが、「ぼく」は水原の言った「初めにあったのは星でしょう？」という言葉をもどどのような意味だと理解したのですか。その内容を五十字以内で説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

修理と修復には違いがある。といわれてもあまり厳密には使い分けられていないため、たいてい違いも区別がつかないと思う。自分でも特に意識して言葉を使いわけていくわけでもない。

まず、ざつくりといえぶつうの生活に関わりがあるのは修理の方だ。車が壊れた。クーラーが壊れた。となれば販売店に相談するか、メーカー修理に出すことになる。修理が完了すれば当然、元のように動くようになる。動かなければ修理ではない。修理とは、経年変化にせよ、外部的要因にせよ、何らかの原因で損なわれてしまった機能を取り戻すのが主目的になる。つまり、つきつめれば機能さえ取り戻せばすべてOKとされるのが修理だ。車であれば動くように。テレビであれば映るように。クーラーは A ようになれば、修理としては完璧である。

修復は少し違う。必ずしも機能を取り戻すのが主目的ともいえないところがある。例えば、知人にポルシェに乗っている人がいる。彼は廃車だったポルシェを手に入れ、エンジン部分をそっくり別の車に換えている。当然、走る。走るのだが、その車がポルシェかといえば、ポルシェではなく、ポルシェの着ぐるみを着た別の車だ。多分、ポルシェにはポルシェ独特の加速性能や操作性などの個性があるのだろうが、この車にはそれはない。形がポルシェなだけだ。しかし、機能としては走ることができる。なんとなく狐につままれたような感じはあるものの修理としては問題がない。

それに対して修復は機能を取り戻す以外に、もともとの制作者やデザイナーの意志をくみとり、それが損なわれない形で復元することを目的している。修理が単純に機能の回復を目的にしているのと比べるとかなり複雑で着地点が見えにくいのが修復だ。

① 修復では機能を取り戻さない、あるいは機能を取り戻せないこともある。車にたとえるならば、修理した車がまったく動かないことは修理ではあり得ない。だが修復ではあり得るのだ。同型の車があれば、そこからエンジンのパーツを流用すれば良いが、古い型の車で元々のエンジンがすでに存在しない、設計図もないとなれば、どうすればよいのかわからない。適当なエンジンをのせることは可能だろう。しかし、それは先に書いた知人のポルシェと同じことで、それは設計者の設計思想に反する可能性がある。厳密に製作時と同じにしようとするれば、適当なエンジンをのせたとすると修理になってしまい、修復ではなくなってしまう可能性がある。厳密にやろうとすればするほど結局のところ、残っている部分、設計者がデザインしたところだけ保存作業をするという流れになるのではないか。つまり修復作業はしたが動かないという車ができる。

B つまり、修理と修復は全く違うものなのだ。仏像以外で私が修復に関わったものに彦根城博物館の古楽器類がある。井伊家が市に寄贈したもので、数百点に及ぶ、琵琶、箏、箏、筆箏

どの古楽器が保管されている。いずれも細かな美しい装飾が施されている。修復にあたっては、形状保存修理が行われた。これはどういった修復かと言えば、字面のとおり、形状、つまり、その美しい装飾をそのまま残すという点を中心にする。まさに工芸品としての修復であって、楽器としての修理ではない。見た目には弦は張られている。音も鳴る。だが、楽器として演奏にたえられるような音が出るかといえどもいえない。② 走らない車と同じだ。

楽器を製作した人間は当然、楽器として造っている。そのため、修理であれば、切れた弦を換える、出ない音を出せるようにするという点が目になるはずだ。だが、工芸品としての修復になると、音というあやふやで主観的なものはひとまずおいて、まずは現存している状態をそれ以上壊れないように保存しようということになる。なぜなのかといえば、設計し、作った人間の痕跡を残すことがもつとも重要な点になるからだ。

もちろん、音の復元ということも可能なかもしれない。だが、形の保存というだけでもかなり大変な作業なのだが、音までを復元するとなればさらに難易度が上がる。作られた当時のニカワ（接着剤）の組成、弦の作り方などが完全にわかっていたら可能かもしれない。だが、運良く復元できたとしても「こんな音だったのかなあ」と想像を巡らすだけで、当時の楽器のテープがなければ本当にそうだったかも確かめようがない。また、さらに厳密に言えば、製作者の意図する音かどうかもわからないのだからこれは際限がない。際限ないところまで復元を試みる修復もあるが、まずは、現存している部分をそれ以上壊れないようにするのが基本なのだ。そこで、博物館や美術館では現状維持修理と呼ばれる、今の状態を維持し、それ以上壊れないようにする修復に力が注がれる。なぜかと言えば、復元を試みても正しい解答がない以上、際限がないのだから。製作者の意図が残っていると考えられる、現在の状態を維持することがもつとも間違いが少ないからなのだ。

では仏像の修理にあてはめるとどうなるのだろうか。まずは実用品としての修理について考えてみよう。車が動くように、冷蔵庫が物を冷やせるように、実用品としての仏像とは何を目的としているのか。それは拝まれることだ。豪華で、きらびやかで、美しい……、それが礼拝対象としての仏像に本来求められている姿である。

つまり、機能を取り戻すことが求められている修理の場合は、仏像を豪華に美しくすることが求められる。それは礼拝対象として、実用品としての仏像の修理だ。拝む対象である仏像を美しく仕立て直すことは、素直な気分であると思う。こういった修理は、仏具屋さんや仏師さんによっておこなわれることが多い。仏師はもともと、仏像を新たに製作するのが本分であるし、仏具屋も自分で職人を抱えている場合にしても、下請けに出す場合にしても仏具を新たに造るのが仕事である。そのためか、修理の際には、漆を塗り金箔を貼ったり、彩色をしたりして新品のように新しくする。漆を塗り重ねたりすると、ふつう彫刻がうまれて形がなまったりするが、腕の良い修理を見ると、違

和感なく綺麗に仕上がっている像もある。そして、仏像が日本に伝来してから、ごく最近まで仏像の修理は基本的にこの修理であった。なぜかといえば、仏像の価値は礼拝対象としての価値であったため、鑑賞用の仏像などというものは多分、存在しなかったからだ。

③ところが、近代に入り博物館や美術館ができ、そこに仏像が展示されるようになってくると事情が変わってくる。博物館や美術館では仏像の文化遺産的な価値や美術的な価値におおいに注目して展示しているわけで、宗教的な価値、…実用品としての価値には目を向けていない。礼拝対象だったという点には留意しているが、それはすでに文化遺産的な意味であって、現在進行形ではない。拜まれていたという事実は記録としては大切だが、では現在も展示物として拜まれる必要があるかといえば、その必要はない。

すると、修理の方法が変わってくる。実用品としての修理は新品のように、美しくすることだ。だが、博物館、美術館所蔵の仏像の場合、一番重要なことが文化遺産的な価値や美術的な価値であるから、そこに留意して作業を進めなければならない。

美術品の修理で大切なことは、絵画や考古遺物、仏像などそれぞれで事情は違うだろうが、まずは基本的には現存している部分をそれ以上壊れないようにすることである。現状維持修理と呼ばれる修理で、現在の状態を維持し、それ以上壊れないようにする作業に力が注がれる。そういったわけで、博物館、美術館所蔵の仏像を修理する場合は、もし、仏像の手足がなくなっても新しく造り直すようなことは基本的にしない。当然、首がなくなっても顔を作るようなことはないし、表面の金や彩色が剥がれ落ちていても、金箔の貼り直しや彩色の塗り直しもおこなわれない。それが博物館や美術館所蔵の仏像の修理である。

では、博物館や美術館所蔵の仏像にやるような現状維持修理をそのまま寺院の仏像に施すとどうなるか。これは問題が出てくる。寺院でも宝物館など博物館に準じるような施設を持っており、そこに展示している像の修理ならばともかく、拜むべき本尊なのに手や足や顔がなままだでは格好がつかないのだ。仏像は、特に本尊やお寺にとって主要な仏像については五体満足にしたいという気分が寺院にある。さりとて、新品のようにはしたくない。博物館や美術館の像のように歴史的価値も尊重したい……。

どうするかといえば、古いところを尊重しつつ、足りないところは新しく作る。そんな修理になる。修理というか修復になる。壊れているクラシックカーをレストア(注)するのに近いイメージかもしれない。どこまで復元するか、仕上がりの様子はお寺の意向や修復者の感性に左右されるし、重要文化財以上であれば文化庁の意向も入ってくる。地方で仕事をするぶんには重要文化財クラスの像を扱うことはないけれども、それぞれの^④落としどころを見極めて仕事をしなければならぬ。だから、同じ損傷状況でも仕上がりが違う可能性がある。

寺院所蔵の仏像の修理は信仰上の意義や文化遺産としての価値が混じり合っており、どの価値を優先させるのかを^④選ぶとていく必要がある。どの価値もそれなりに意味があるが、どれかを優先させる必要がある。すべてを満たす修理はたぶん存在しない。だから、修復には正解が存在しない。質の高い修復はあっても正解といえる修復はない。正しい修復はない以上、修復の結果に対しては批判がつきまとう可能性があることは覚えておかななくてはならない。

(飯泉太子宗『時をこえる仏像 修復師のしごと』より)

(注) レストア：元の状態に戻すこと。

問一 A に入る適切な言葉を、十字以内で答えなさい。

問二 線①「修復では機能を取り戻さない、あるいは機能を取り戻せないこともある」とありますが、それはなぜですか。「車」を例にして、次の に入る表現を文中から二十九字で抜き出して答えなさい。

車の場合には こともあるから。

問三 B に入る表現として適切なものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

- ア 修理としては合格。しかし修復としては失格。
- イ 修理としては失格。しかし修復としては合格。
- ウ 修理としては合格。しかも修復としても合格。
- エ 修理としては失格。さらに修復としても失格。

問四 線②「走らない車と同じだ」とありますが、どういう点で「同じ」のですか。車との共通点を踏まえて三十五字以内で説明しなさい。

問五 — 線③ 「ところが、近代に入り博物館や美術館ができ、そこに仏像が展示されるようになってくると事情が変わってくる」とありますが、「事情が変わってくる」とはどういうことですか。その内容を六十字以内で説明しなさい。

問六 — 線④ 「落としどころ」とほぼ同じ意味で使われている漢字三字の言葉を文中から抜き出して答えなさい。

問七 本文の内容に合っているものを次の中から一つ選び、ア～エの記号で答えなさい。

- ア 修復では、失われた機能を取り戻すかどうかではなくて、そのものの価値や作った人の意図をできるだけ損なわずに復元できるかが大切である。
- イ 製作当時の資料や記録が残っていれば、それを元通りに修復するのは可能であるが、修理では元通りの機能や性能は取り戻せないの
で、修理よりは修復の方が良い。
- ウ 仏像は本来、拝まれる対象としての価値を大切にすべきであり、頭や手がなければ不自然だから、修復をするのではなく修理をするのがよい。
- エ 修理も修復も元の状態に近づけることが大切であるが、車や冷蔵庫は修理であり、古楽器や仏像は修復というように言葉を使い分けていく必要がある。

☐ 次の各グループには仲間はずれのもの、組み合わせが間違っているものいずれか一つが含まれています。その記号を答えなさい。

- 1 身につけるもの
 - ア 鎧よろい
 - イ 十二単じふにひとえ
 - ウ 輿こし
 - エ 羽織はおり
 - オ 振袖ふりそで
- 2 夏の季語
 - ア 浴衣ゆかた
 - イ 時鳥ほととぎす
 - ウ 茄子なす
 - エ 紫陽花あじさい
 - オ 七夕たなばた
- 3 作者と作品
 - ア 芥川龍之介（雪国）
 - イ 宮沢賢治（グスコーブドリの伝記）
 - ウ 太宰治（走れメロス）
 - エ 新美南吉（ごんぎつね）
 - オ 夏目漱石（坊っちゃん）
- 4 昔の国名と現在の都道府県名
 - ア 出雲（島根県）
 - イ 肥後（青森県）
 - ウ 越後（新潟県）
 - エ 甲斐（山梨県）
 - オ 信濃（長野県）
- 5 ものの数え方
 - ア ふとん（ひとくみ）
 - イ うさぎ（いちわ）
 - ウ 箸（いちぜん）
 - エ 俳句（いつしゆ）
 - オ 手紙（いつつう）

四 次のそれぞれの――線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- 1 チイキ活動に参加する。
- 2 パイロットは人の命をアズかる職業だ。
- 3 台風の影響でボウフウ警報が出る。
- 4 文学賞の受賞をジタイする。
- 5 乱雑な机の上をトトノえる。
- 6 母がいつも「勉強しなさい」と言うのにはヘイコウする。
- 7 生徒会長としてのツトめを果たす。
- 8 新しいパソコンのシステムをドウニユウする。
- 9 水筒の水を飲みホしてしまふ。
- 10 親フコウをしてはいけない。

